岐阜県徳山村の口承文芸に関する調査報告（第17報）

高木靖弘・仲野悦子
野部博子*・棚橋美代子**

An Interim Report on the Oral Literature of Tokuyama Mura, Gifu Prefecture (17)

Yasuhiro Takagi, Etsuko Nakano,
Hiroko Nobe and Miyoko Tanahashi

We summarizes the reports on the oral literature of Tokuyama Mura which have been published separately in sixteen parts in recent five years.

はじめに

1978年9月，私たちが，初めて徳山村の地を踏んだのは，岐阜「民話研究のつどい」の共同研究グループとしてであった。

同年4月に結成された岐阜「民話研究のつどい」の目的とした所は，「岐阜県の民話採集及び，民話研究を基礎としながら，地域に根ざした児童文化，児童文学の質的向上をめざす」ことであり，具体的活動として「各市町村で，民話の採集や，民話の研究をしながら，古老から話しを聞いたり，民話絵本を読むなど，児童文化活動を行う……また『岐阜県の民話，伝説，わらべうた資料集成』を編纂」することであった。しかし，残念なことに，当初の理念，目的にもかかわらず，活動が伴なわず，現在では，岐阜「民話研究のつどい」は，発足後1年を経ずして，会の活動を停止してしまっている．

私たちの「岐阜県徳山村の口承文芸に関する調査」グループは，はじめ，岐阜「民話研究のつどい」の一研究グループとして出発したのである．しかし，岐阜「民話研究のつどい」が活動を停止しているいまも，私たちの研究グループは，そこからはなれて，現在まで，独自の研究調査活動をつゞけてきたのである．

私たちが，徳山村を調査対象地域として選んだのは，以下の三つの理由によるものである。

一つは，周知の如く，徳山村が近くダム建設によって，全村が湖底に沈むことによる。この地域の昔話，伝説，わらべうたは，いま採集して置かなければ，もう二度と発掘することができなくなる可能性があるからである。

＊滋賀県立短期大学
＊＊中京女子大学

二つには，過去の文献により，徳山村が，昔話，伝説，わらべうたの宝庫であると考えられたからである。

三つには，調査対象として，徳山村の口承文芸の全貌を把握するに適当な規模であろうと考えられたからである。

さて，1983年，現在の徳山村は，1957年（昭和32年）に始り，26年間に亘って続いたダム建設問題が，いよいよ大詰をむかえ，あわただしい動きを示してきている．それは，村民の要求とは，大きなへだたりのあった補償問題が，第2次補償基準の提示以来，さらに交渉を重ねた結果，一定の進展をみせ，年内妥結に向って大きく動き出したことである。村民の移住先等の整備も，ほぼ終ろうとしているいま，交渉妥結をみれば，一気に，離村に向けて動き出す気配が見られるのは，否めない事実である。

そうした状況の中で，私たちのこの研究調査も，5年の歳月を経たいま，村内八地区のすべてについて，今回の目的に即した調査を一応終り，一定の成果を得たものと考える。

その一つには，別表1，及び2に見られる如く，多くの優れた伝承者と出会い，昔話，わらべうたとも，多くの資料が得られたことである。

その二には，極めて当然なことではあるが，八つの地区それぞれに，その地のみで採集できた昔話，わらべうたがあり，またその反対に，複数の地区に亘る共通の昔話，わらべうたの存在が確認された。

その三つ目には，伝播・伝承形態を究める糸口をつかむことができたことである。すなわち，昔話については，優れた伝承者の家系を見出したこと，また，話者の典型ともいえる語り手にめぐり会えたことである。また，わらべうたについては，世代の異なる多くの演唱者を得，そこからさらに広げ得る可能性が期待できることである。

その四つ目には，東谷川筋，西谷川筋で，伝播・伝承経路ともかかわって，傾向の違いが見られること。さらには，戸入地区が，昔話・わらべうたとも，他の地区には見られない個有の特徴が見られることである。

その五つ目には，この研究調査をすすめる中で，伝播・伝承形態をさらに明らかにしていくために，徳山村周辺の隣接地域での昔話・わらべうたの調査研究を行わなければならないことが明らかとなった。

これらのことから，この5年間の調査が，前記の目的にそって研究をすすめたことに誤りがなかったと，確信するものである。

以上述べた如く，成果の上にたって，新たな段階に歩をすすめるべく，総括し，この調査報告の区切りとしたいと考える。

なお，本稿にまでいたる報告は，発表予定分も含めて，以下に記す研究誌に発表した。

第1報，岐阜県徳山村の口承文芸に関する調査報告
聖徳学園女子短期大学紀要，第5集，1979年3月

第2報，同，昔話「食わず女房」の児童文化財化について
滋賀県立短期大学学術雑誌，第20号，1979年3月

第3報，同，本郷・戸入のわらべうた
聖徳学園女子短期大学紀要，第6集，1980年3月
答4報，同，戸入の昔話
聖徳学園女子短期大学紀要，第6集，1980年3月
第5報，同，昔話〝桃太郎〟を中心に
滋賀県立短期大学学術雑誌第21号，1980年3月
第6報，同，門入のわらべうた
聖徳学園女子短期大学紀要，第7集，1981年3月
第7報，同，山手・櫨原のわらべうた
聖徳学園女子短期大学紀要，第8集，1982年3月
第8報，同，戸入の昔話(2)
中京女子大学紀要，第16号　1982年3月
第9報，同，戸入の伝承あそび(1)
滋賀県立短期大学学術雑誌，第23号，1982年3月
第10報，同，塚・下開田のわらべうた
聖徳学園女子短期大学紀要，第9集，1983年3月
第11報，同，門入・山手の昔話
中京女子大学紀要，第17号，1983年3月
第12報，同，櫨原・塚の昔話
滋賀県立短期大学学術雑誌，第24号，1983年3月
第13報，同，昔話「瓜姫とあまんじゃく」について
滋賀県立短期大学学術雑誌第25号，1984年3月
第14報，同，下開田の昔話
中京女子大学紀要，第18号，1984年3月
第15報，同，上開田の昔話
滋賀県立短期大学学術雑誌，第26号，1984年9月予定
第16報，同，上開田・戸入・下開田のわらべうた
聖徳学園女子短期大学紀要第10集，1984年3月

I

〈徳山村のわらべうた〉

私たちが，徳山村において，この5年間に採集したわらべうたは，27名の演唱者により，105曲にものぼった。徳山村が，近き将来にはダムの湖底に沈み，村の文化がなくなってしまうという特殊な事

情を考えるとき，貴重な，意義ある資料となるものと確信する。

105曲の採集地区別内訳は，下開田16曲，本郷17曲，上開田２曲，戸入14曲，門入16曲，山手15曲，櫨原９曲，塚16曲である。これらを資料として本稿では，1)，分布について，2)，伝承について，3)，徳山村のわらべうたの旋律の特徴，について述べ，本報告の総括とする。

1．分布について

すでに，本報告第10報IIIの項で述べた如く，村内八地区における同歌の分布状況は，別表３に表わした如くである。すなわち，採集わらべうた105曲について，それぞれ，種別，採集地区別に分類し，さらに複数地区にまたがる同歌を１曲として整理すると，別表に示す如く，44曲としてまとめることが出来る。

種別でみると，てまり唄が21曲（延55曲）で，ほぼ全曲の半数に達する。その他は，鬼あそび・鬼きめ唄が11曲（延26曲），手おどり・お手玉・おはじき唄が４曲（延12曲），縄とび・片足とび唄が２曲（延２曲），子守唄が４曲（延11曲），となえ唄が２曲（延２曲）である。

徳山村における同歌の分布状況をみるとき，以下の五つのケースに分類することができる。

1)　徳山村内全域に存在するであろうと考えられるもの。６曲

あったら松や　　（曲番，67，43，17，86，１）

こっちから見えるは（〃　，63，73，57，39，９，88，90，24）

すすれすすれ　　（〃　，68，74，62，51，19，84，96，37）

おおさいどりか　（〃　，71，76，60，49，83，２，27）

ねんねんころいち　（〃　，72，61，44，14，85，34）

おかくおかく　　（〃　，58，46，82，99）

2)　東谷川沿い地区（塚・櫨原・山手・本郷・下開田）に存在するであろうと考えられるもの。５曲。

ここのおとらの　（曲番，64，41，80，104）

ここのおきくは　（〃　，66，59，42，102）

じょりかくし（くねんぼ型）（〃　，69，75，55，45，４，16）

かくれんぼかくれがさ（打出の小槌型）（〃　，70，56，52）

ねんねん坊の　　（〃　，72，61，85）

3)　西谷川沿い地区（門入・戸入・上開田・本郷・下開田）に存在するであろうと考えられるもの。２曲

わしんうしろの（曲番，10，87，36）

ぜんまいわらび（〃　，13，89，91，93，92）

4)　二つの地区にまたがる同歌ではあるが，その地区が隣接地域に限られるもの，或いは，谷をへだてて遠く離れすぎているもの。４曲，

でんでんたたくは　（曲番，３，15，103）

てんまりやてんまりや　（〃　，6，79）

こんめおした　　（〃　，48，26）

いちいち一ちょうとって　（〃　，78，23）

5）現在まで，一地区のみで採集されたもので，村内で同歌の存在が未確認のもの。27曲，

以上五つのケースに分けて，分布状況について述べたが，あくまでも現段階までであって，今後の調査によって，4)あるいは5)のケースのものでも，1)，2)，3)，のケースになる可能性は充分考えられる。

徳山村内における同歌の分布状況について述べたが，今後の課題として，伝播経路ともかかわって，徳山村が，あるいは，東谷川筋が，西谷川筋が，いかなる位置をしめるのか，今後の調査を待ちたいところである。

2．伝承について

徳山村内における，わらべうたの伝承については，第1報，第3報，第6報，第7報及び，第16報で，部分的にではあるが，その都度述べてきた。すなわち

1）「じょりかくし」による比較検討，（第1報）

ここでは，古い型のくねんぼ型「じょりかくし」と，現在でも歌われているお寺の坊さん型「じょりかくし」とを比較し，古いくねんぼ型が，旋律が単純，詞は意味不明で呪文的であるのに対し，お寺の坊さん型は，施律も変化に富み，音域も広くなり，詞も理解し易くなっていることを指摘した。

2）距離のはなれた地区における同歌の比較と，同地区内異年代による同歌の比較（第3報）

ここでは，本郷と門入という距離をへだてた子どもの足では交流不可能な地区にあっては，何らかの形で，大人の人為的介在があったであろうこと。

二つ目は，本郷地内の年代の違うところから採集した同歌で，「極楽浄土」という言葉が，「極楽どうじょ」と間違えられた言葉がやはりそのまま間違えられて伝えられていること。

3）お寺の坊さん型「じょりかくし」による，現在の徳山村の子どもたちのわらべうたとの比較（第6報）

ここでは，楽曲的，旋律的にも，現在の徳山村の子どもたちのものの方が統一がとれていて，現代風になっていること，さらに，詞も，方言がなくなり，標準語化されてしまっていることを指摘した。

4）地域的な伝播・伝承について（第7報）

ここでは，隣接地区，あるいは，東谷川筋，西谷川筋で，同歌がどの様に存在するか，どの様に変化しているかを見たものである。さらに，戸入地区が，他地区と共通する同歌が少なく，少しく傾向が異るのではないかという疑問を指摘した。

5）同歌による同年代異地区での比較（第16報）

ここでは，下開田・本郷・上開田・戸入・門入の五つの地区に共通する同歌「ぜんまいわらび」

をとり上げ，詞の大意が全く同意であるものが，それぞれの地区のいい回し，方言に同化されていること。

以上五回に亘って，それぞれ述べた。これらのことから，あるいは，全体的に見渡した中で，次の諸点を指摘したい。

1) 子どものあそびの世界のことではあるが，何らかの形で，大人の人為的介在があったことである。嫁入り婚によるものと思われるが，そのことが，距離の克服，すなわち，離れた地区に突然新しい歌が現れたり，ある時期から歌が変ったりすることがある。また，大人の介在によって，間違いの訂正がなされたことは，当然考えられる。

2) 逆に，子どもの世界だけで，間違ったものが，子どもの理解できる身近な対象物や，言葉に置きかえられて，そのまま伝承されている。

3) 記憶が新しいから当然とはいえるが，古い世代の歌に比べて，若い世代の歌の方が，音楽的にみて，拍子，リズムとも統一がとれ，しっかりしている。また，旋律も変化に富み，音域も広がっている。

4) 同じ意味の言葉が，それぞれの地域で，その地域の独特のいいまわし方，方言に同化されている。

5) 全国的に流布した歌が，徳山村に入って，徳山村独自の旋律に同化されている。

6) 東谷川筋，西谷川筋で，進入・伝播経路の違いからか，それぞれ，独自の傾向が見られる。

7) 戸入地区だけが，独自の曲が多く，他地区と異る傾向が見られる。

以上，伝承について総括的に述べたが，分布状況ともかかわって，さらに，徳山村内は勿論，徳山村周辺地域の調査研究をすすめたいと考える。

3．徳山村のわらべうたの旋律の特徴

徳山村で採集した全105曲のわらべうたについて，音楽的角度からさまざまな検討を加える。まず，音域的に見てみると，

2度あるいは3度で，2音ないしは3音からなる。音域のせまいものは，一般的に，となえ唄や，鬼きめ唄などに多く見られる。ここでも，その例にもれず，「ぜんまいわらび」（曲番，91，92，93），「じょりかくし」（曲番，2，4，69）など9曲を数える。

4度，5度の曲は，テトラコード，あるいはテトラコードの上又は下に2度の音が1つ加わった形で，3音ないしは4音の音列をなす比較的せまい音域で，単純な旋律が多い。ここでは，鬼きめ唄の「ぜんまいわらび」（曲番13，89），鬼あそび唄の「じょりかくし」（曲番16，38，55，75），「中の中の小坊主」（曲番31，98）その他なわとび唄，片足とび唄，おはじき唄等，計37曲を数えることができる。

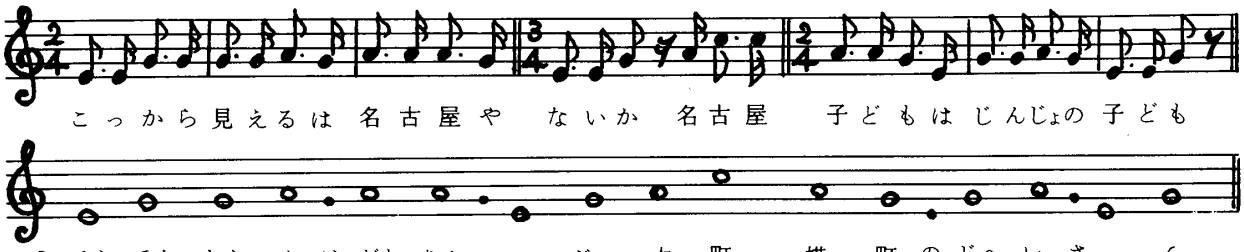
6度，7度，8度の5音ないしは6音の音列からなる曲になると，旋律も変化に富み，美しい旋律の曲が多くなる。手まり唄「こっから見えるは」（曲番9，39，57，63，73，88，90）をはじめ「あったら松や」（曲番，1，17，43，67，86）などほとんどの手まり唄など，採集わらべうたの半数以上の56曲が，この範疇に入る。

9度以上の曲になると，極めて少なく，遊びを伴なうわらべうたにはほとんど見られず歳事唄，子

守唄等に見られるのが一般的である。ここ徳山でも，3曲を数えるのみで，そのいずれもが子守唄である。「ことしはじめて」（曲番35）が9度，「ねんねんころいち」（曲番72）が10度，同じく「ねんねころいち」（曲番61）が12度の3曲であるが，10度，12度の「ねんねころいち」は，曲の後半にはそれぞれ転調して，別の子守唄が連続して歌われているのであるから，必然的に音域は広くならざるを得ない。

次に，旋法を見てみると，徳山村のわらべうたのほとんどが「陽旋法系列であり，律旋法，呂旋法を含めて94曲を数える。陰旋法のものは11曲に過ぎず，それも曲の最初は陰旋法で歌い出されて，途中で転調し，終る時は陽旋法になっているものが大半である。

次の楽譜は，徳山村の代表的な手まり唄「こっから見えるは」（曲番9）の歌い出し部分である。そして，その下の楽譜は，同曲を旋律の動きだけにしたものである。



No.3 でん でん たた く は だれ さん　じゃ 本 町 横 町 の じへ い さ ん
No.5 れん げの は な と さく ら の 花　と む すび あわ せ て たす き にかけ て
No.24 てん てん てん まるてんまる　や あ ぶら とろ と ろ かみゆう て
No.43 あっ たら 松 や から 松　や に しに さい た る その 枝 に
No.104 おと らの まえ が み だれ わ け　て うつ くし や ー うつくし や
No.105 一 かけ 二かけ 三 か け て　四か けて 五か け て はしをか け

ここで興味あることは，その旋律の動きが「でんでんたたくは」（曲番3），「れんげの花と桜の花と」（曲番5），「てんてんてんまる」（曲番24）「あったら松や」（曲番43），「おとらの前髪」（曲番104），「一かけ二かけ」（曲番105）と全く同じであるということである。このいずれもが手まり唄であるが，その歌われている地区は，本郷・下開田・山手，そして門入である。すなわち，地区が異り，詞が違っていても，徳山の手まり唄は，独自の旋律で，ほとんどが同じ旋律であるということができる。さらに著るしきは，全国的に流布した「一かけぶし」までもが，その徳山村の旋律に同化されてしまっていることである。

以上述べた如く，音域，旋法等では，一般的なわらべうたと何ら変るところは見られないが，手まり唄の例で見られる如く，独自の旋律の影響が大きく，外から入ってきたものをも同化してしまうということは，極めて興味深く，特徴的なことである。

この章を終るにあたって，以下のことを今後の課題としたい。

1）村内全ての地区から採集するという一つの目標は達成し得た。しかし，部分的には未達成の世代の異る層からの採集，子ども達からの遊びを含めた採集等，目的意識的調査を一層すすめる。

2)　ダム建設問題とかかわって，速やかに，集中的な調査活動をすすめる。

3)　伝播経路とかかわって，徳山村周辺地域の調査活動にとりくむ。

II

〈徳山村の昔話について〉

昔話は，どこの誰が作り出したのかわからない一つの物語である。その物語は，各時代を生きぬき，人から人へと語り継がれ，その語り手の思いや願いをこめた不朽の名作である。

このような昔話は，ある時は悲話になり，ある時は笑話にもなるわけである。そして，これらは，語り手と聞き手が揃ってはじめて成立するものである。すなわち，同一の語り手が同一内容の話を語ったとき，時と場所，聞き手が異なれば当然，表現方法，語り口がかわってくるものである。これが口承文芸，とりわけ昔話の特徴とも言えよう。

今回，徳山村の昔話採集の第一次調査を終了した段階で，私たちは興味深い点を見い出すことができた。

一つには，伝播伝承と語り口の問題である。すでに，第5報，第13報において若干の考察は試みたが，全村の一次調査終了により，更にくわしい比較が可能になったことである。

つぎに，伝承者の問題である。前述のごとく，昔話は，語り手と聞き手の存在により成立し，時，場所が変われば，表現方法も異なってくる。しかるに，昔話はその時その時が一つの作品であり，同じ話者でも語る条件が異なければ複数の話を語ったことになると考えられる。調査期間中，同一伝承者により同型の昔話を幾度も聞く機会に恵まれたことにより，その変容状況，話者の伝承態度が明らかになったことである。

本報では，上記の点に着目し，昔話の伝承地区，伝承者の問題を追究していきたいと考える。

1．調査期間及び伝承者

別表1

2．分布及び採集年月日

別表4

3．伝播伝承について

徳山村の昔話の分布状況をながめてみるとき，比較的全地区に分散して伝承されている話に，「桃太郎」「うり姫女郎（御前）」「へたきり雀」「山姥のはなし」「和尚と小僧」「かっぱのはなし」があげられる。ここでは，二・三の昔話を例に地区間の相違を述べてみたいと考える。

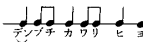
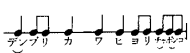
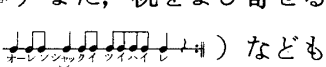
「桃太郎」については表1にみられるように，桃の流れくる様子では，塚地区では実に調子のよい語り口で伝承されている。梅本まさゑ氏の語る「デンブチカワリヒヨリ（  ），橋本美代氏の語るデンブリカワヒヨリチャポンコ（  ）また，桃をよび寄せる語りでは，本郷の斉藤みのえ氏らの語るオーレンシャックイツイハイレ（  ）なども聞き手の耳に心

表1　「桃太郎」の語り口

地区名及び話者 / 内容	下開田	本郷	山手	櫨原	塚
	江崎さき	斉藤みのえ，江口いとえ，北村秀子	堀田よしゑ	竹藪やすの	梅本まさゑ
桃の流れてくる様子	ぶかぶか	どんぶらこ どんぶらこ	どんぶりこ どんぶりこ		でんぶちかわり ひより
桃をよびよせる様子		こっちこーい こっちこーい おーれんしゃっくい ついはいれ おーれんしゃっくい ついはいれ			こっちこいよ こっちこいよ
ひろった桃をしまっておく場所	戸棚		前かけ	麻紡籠（おみかご） 針籠	針入れる籠
お供についていくもの	犬 猿 雉子	犬 猿 雉子 蜂 たち臼 貝がら	犬 猿 雉子		犬 猿 雉子

地区名及び話者 / 内容	塚	上開田		戸入		門入
	橋本美代	細尾ひめの	村沢智子	増山たづ子	橋場金之丞	清生しな，泉豊子
桃の流れてくる様子	でんぶりかわ ひょりちゃっぽ んこ		どんぶりこ どんぶりこ		ぐらぐら	ごろんごろん
桃をよびよせる様子						
ひろった桃をしまっておく場所	針籠	針籠	針籠	たて臼		
お供についていくもの	猿 雉子 犬				猿 雉子 犬	雉子 他

地よくいつまでも残るリズムである。他地区では，これらの表現は語られていない。拾った桃をしまっておく場所として針籠の中が多く，下開田（戸棚）山手（前かけ）戸入（たて臼）が少し異なるようである。戸棚と伝承される地域は熊本，愛媛，島根，山梨，宮城，岩手の各県に分布し，岐阜県では吉城郡で語られている。たて臼は福井県で語られており，前かけ，針籠という表現は，現在のところ県内外ともに確認されていない。徳山村独自のユニークな表現と思われる。また，第5報で示したように，本郷地区で伝承される「桃太郎」のみ猿蟹合戦混同型で，自づと桃太郎の鬼退治のお供につくものも他地区と異なってくる。この型は，愛媛，岡山，東京，山梨で語られたと記録されている。

「うり姫女郎（御前）」は，第13報で比較検討しているので本報では割愛する。

「へたきり雀」は「舌切雀」でそれぞれの地区間での差は見い出せていない。

「山姥のはなし」では，徳山村では「山姥のはなし」と呼んでいるのに三通りの型が確認されている。一つは，「ああ，飯食べん嫁さんの話か」とか「休んだら軽うなったの話か」のことばで代表される「食わず女房」の型である。二つには戸入の山本花枝氏が語る「山姥」である。これは，蛙が女に化けて男の妻になり飯は食わずによく働くという語りで「食わず女房」型の話となっている。しかし，『日本昔話大成』分類では「蛙女房」「食わず女房」の両方で処理している。徳山村でこの型の話を伝

承しているのは氏だけである。しかも山本花枝氏はもう一つ「山姥のはなし」として山姥蜘蛛型の話も語っているところから，別個の話として「山姥のはなし」を伝承しているようである。女房が蛙の型は，県内では吉城郡で確認されている。三つには，本郷の村山いちえ氏の語る実話めいた世間話型である。

また，「食わず女房」は，さきの山本花枝氏の語る蛙型の他に塚の梅本まさゑ氏，橋本美代氏の語る嫁さんは蛇であったという蛇型の話が伝承されている。全国分布では，嫁さんの正体は，鬼，蜘蛛，蛇，山姥，蛙など伝承されているが，徳山村では蛇型は塚地区のみである。蛇型で語られる地域は，『日本昔話大成』によれば，佐賀，京都，長野，福島，山形の各県で，岐阜県では吉城郡，大野郡で確認されている。蜘蛛型は，山手，塚，戸入，門入で伝承されており，この型の他地域での分布は，新潟，福井県にはじまり西日本に多いとされている。

もう一つ「蛇のはなし」として徳山村には三つの型が伝承されている。一つは，戸入の増山たづ子氏，山本花枝氏の語る「蛇聟入芋環型」の話である。この話は，蛇が青年に化けて女の所へ通ってくる。母親の助言で娘は男の着物に針をさしておく。母親が糸をたどっていくと男は池の中にはいっていき，血を流している。親蛇が子供をおろす方法として桃酒，菖蒲酒，菊酒の話をする。その話を聞きつける。その後は魔よけとして，これらの行事が行なわれているとして語られている。二つは「水乞型」で父親が日照りで困りはて田に水をくれる者に三人娘の一人を与えるという。そこへ男が現われ水を田につけるから娘をくれとやってくる。一ばん下の娘が行くことになる。親は針を持たせる。行先は池であった。娘は先に夫を池の中へ入いらせ，持ってきた針を投げ入れる。夫は蛇体となって水面に浮く。娘はにげ帰るという話である。この型は下開田，塚，それに戸入で語られ，戸入の山本花枝氏は両者の型の伝承者である。さらにもう一つの型は，増山たづ子氏や梅本まさゑ氏の語る世間話的な蛇の話である。「芋環型」「水乞型」は両者とも全国にわたって分布している話である。

以上のように，昔話の伝承地区を比較するとき，徳山村での昔話の伝播，伝承が明らかになってくる。すなわち，徳山村の昔話は，東日本，西日本全国各地の伝承話を持ちあわせ，東西文化の流入流出をうかがわせる。とりわけ，岐阜県内での類似点，共通点を吉城郡や大野郡に多くみうけられるということは今後隣接地域の調査と同様，飛騨，北陸地域の調査もあわせて考えねばならないことを示唆したものと考える。

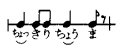
最後に徳山村における昔話の発端のことば結末のことばが確認されたので紹介し，この項を結びたい。

下開田

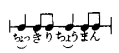
発語・昔まったとぉ

・昔々あったとさ

結語・ちょっきりちょうま

（  ）

・ちょっきりちょうまん

（  ）

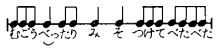
・しょもやしょっきりしょうらいべったり　へったんかったんちょっとむけ（本郷出身者）

（
）

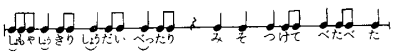
本郷

発語・昔々あったとさ

結語・むごうべったり　みそつけてべたべた

（ 
）

・しょもやしょっきりしょうだいべったり　みそつけてべたべた

（ 
）

山手

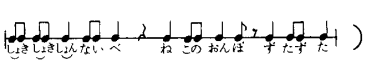
発語・昔々なぁ

・昔々あるところに

結語・これまで

（
）

・しょきしょきしょんないべ　ねこのおんぼずたずた

（ 
）

櫨原

発語・なし

結語・なし

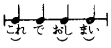
塚

発語・昔まったと

・昔々ね

・昔なぁ

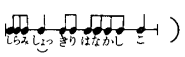
結語・これでおしまい

（ 
）

・こんでおしまい

（
）

・しらみしょっきりはなかしこ

（ 
）

上開田

発語・なし

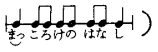
結語・なし

戸入

発語・昔あったとぉ

・昔々あったとぉ

結語・まっころけのはなし

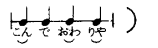
（  ）

門入

発語・昔々なぁ

・昔あるところに

結語・こんでおわりや

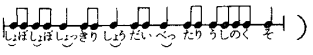
（  ）

・はなしはこんでしまいや

（ ）

・しょぼしょぼしょっきり　しょう

だいべったりうしのくそ

（  ）

4．昔話と語り手

徳山村の昔話の全貌を明らかにするなかで，昔話の語り手である話者の特徴が明らかになった。

1つは，話者の家系がある点である。これについては，本調査報告の第11報（中京女子大学紀要第17号，p57）でのべているので，詳しくはふれないが，祖母から母に，母から娘に同じ話しが伝承されている例が多多あった。

2つは，話者には2通りのタイプに分類される点である。完全な形，あるいはほぼ完全な形の昔話を記憶しており，何度聞いても同じ話を語れるタイプ。一方，時間や場所，聞き手の変化で話しにも変容がみられるというタイプがあったことである。

ここでは2つ目の特徴である，話者と昔話の変容について，戸入の山本花枝氏・増山たず子氏を例にあげながら明らかにしていきたい。

山本花枝氏・増山たず子氏の両名は，本調査を開始して以来毎年聞き取り調査を行っている。その中で同じ話しを何度か聞き取るということも行っている。（別表4参照）

〈山本花枝氏の場合〉

山本花枝氏の場合　例えば「和尚と小僧②」（名彙「和尚と小僧」大成530「指合図」）は，1978年・1980年・1981年1983年と4回の同じ話しを採集する機会を得た。それらの話を比較してみると，ほぼ変化はみられない。

「お寺では，法事とか人の寄る時，ごはんをようけ炊くこともあるわな。ほんで和尚さんがな，『もうしゃべっとるのはめんどくさいで，おれが指を二本，こう出したら二升炊け。三つこうやったら三升炊け』って小僧にそう言ったんじゃって。」（1978年）

「ある村に，和尚と小僧がおってな，そいで和尚が小僧と約束してな，『小僧は，わしがな，1本指をさし出いたら1升ごはん炊け。2本あげたら2升炊け。』と，まあこういう和尚と小僧が約束したでな……」（1980年）

「あるところにな和尚と小僧がおってな，そいで和尚が小僧にな，『お客さんがくると大勢くると，ごはんをようけ炊かんならん。そいで2本指をさしだしたら2升，3本だしたら3升炊け。』と，まあこういう約束をしたんじゃ。」（1981年）

「昔ある所に和尚と小僧が，お寺に住んでおったんじゃなぁ。そして和尚がなぁ，いつでも小僧に，『わしが指を1本出したら米を一升炊け，また2本出したら2升炊け』」（1982年）

「お寺やもんでなぁ，色々その大勢お客さんが来る時もあるし，少ない時もあるだろ。ほんで1ぺん指をやったら1升炊け，2本やったら2升炊け，ほいで3本やったら3升炊けと，こうやって教えてやった」（1983年）

以上のように，内容に変化はなく，言いまわしや表現上の違いにとどまる。他の話しの場合も明らかに忘れていると思われる欠落や，思い違いと思われるもの以外に変化は見られない。次に比較する増山たず子氏の場合と異なり，語る時間あるいは場所・語り聞かせる相手が子どもか成人か若いか老人か，複数人か1人か等等，ほぼ無関係に語られていることがわかる。

〈増山たず子氏の場合〉

増山たず子氏の場合は，回を重ねて語られる毎に変化してきているといえる。「瓜姫女郎」（名彙「瓜子姫子」大成1445「瓜子織姫」）は，1979年(A)・1981年(B)・1983年(C)に採集されているので，比較してみると次の表2のようになる。

表2　増山たづ子氏による「瓜姫女郎」の比較

瓜　姫　女　郎　A	瓜　姫　女　郎　B	瓜　姫　女　郎　C
〈1979年9月9日〉	〈1081年9月18日〉 むかしむかしあったと。 じじとばばがおってな。	〈1983年9月20日〉 むかしむかしあったと。 じじとばばがおってな，ほいで子どもがおらなんだもんでな， 「あっらも子どもが欲しいなぁ」 と，話しとったんじゃて。 ある日のこと，じじは山へ芝刈りに行き，ばばは川へ洗たくに行ったんやと。 ほったら，門入の方から，大きな瓜が，ドンブラコ，ドンブラコと流れてきたんや。 「こりゃてんぽうでかい瓜が流れてきたが，じじが山から来たふりにな，水屋に冷やかいといて，ほいで2人で食わい。」 と思って，洗たくもんといっしょに瓜を持って，籠(かご)に入れて川からあがったんじゃと。 ほいでじじが 「やれやれ暑いや，今戻ったぞばば」 と，たきもんをかついで戻って， 「よっこらしょ，よっこらしょ」と，おろいてほいで， 「暑かった」 と，足をふくしなにな，ばばが，

瓜　姫　女　郎　A	瓜　姫　女　郎　B	瓜　姫　女　郎　C
		「まぁーじじ，よいところに戻ってきた。今日は洗たくをしに行ったらな，門入からいかいいかい瓜が流れて来たんじゃて。われといっしょに食いと思って，今，水屋にふやかいてあるんやが」 ほいで，まな板を持ってきて，瓜を切らーとしたらな，ほいたら瓜がパカンと割れてな，そこから愛らしい愛らしい女の子のねんねが出てきたんじゃ。 ほいじゃもんで， 「こりゃうれしゃ。あんらが子どもを欲しい欲しいと言ってたもんやでこれも天からのさずかりもんやて，ありがたい」 というしなに，瓜姫女郎って名前をつけてな，大事に大事に育てたんやと。
瓜姫がはたを織ろう。	そして，そこに美しい美しい瓜姫女郎っなぁ，あれがおったんや。 ほして，大事な子じゃもんで，とだいへも出さずに家の中へこうしてはた織りをして，とだいの仕事はちっともさせなかったんじゃて。	ほいで，ばばがはた織りを教えたりして大事に育てたんや。 ほいたら，その娘が普通の子よりもどんどん急にいこうなってなそいで娘になったんや。
親が，じじもばばが， 「これを，誰が開けよといっても，絶対戸を開けるなよ」 と，くれぐれも行って出て行ったんじゃがな。	ほいで 「あんら，山へ行ってくるで。必ず誰か戸を開けてくりょと言っても，この戸を開けてやんなよ。あまんじゃくが入ってきたりするとかなわんで」 と言って，山へ，じじとばばが行ったんじゃて。	ほいで， 「今日は親類に法事があるでな，どうしてもそこへ行かならんで，われは1人留守番をしとれ」 ってな。 それまで1ぺんもその娘さん1人にしといたことないんやけどな。 「そのかわり，あまんじゃくが来るかもしれんで，もしあまんじゃくが来ても，絶対に家の戸を開けんなよ」 って言って，じじとばばは法事によばれたんや。
ほして，あの，あまんじゃくっていうやつが来て， 「開けてくれ，開けてくれ」って。 「これは，絶対開けられん。どうしても開けられん」 開けられんいうのに，障子を破ってな，まぁ， 「そこを開けてくれ，開けてくれ」 いうもんじゃで，仕方がないもんじゃで，ちいと少し開けたら， 「まあちっと開けてくれよ」 っていって，だんだんいういちに，こんだは手をかけて，天手力男命のように，ガァーッと，ひき開けて，入って来てな，	ほして，2階ではた織りをしとったら，そこへあまんじゃくが来て， 「ちーとここを開けてくりょ」と，言うんじゃて。 ほいでも，じじとばばが開けんなと言ったもんだで， 「いや」 と言ったんじゃて。 ほしたら，あんまりいつもかも 「ちーと開けてくりゃ。ちーと開けてくりょ」 と，言うもんじゃで，瓜姫女郎はものすごく心の優しい娘じゃったもんだで，かわいいぞと思って，ちーとこうして開けたんじゃて。 ほしたら，指が入ったもんで，そこからあまんじゃくが，ガーッと開けて，	瓜姫女郎は2階で，ガシャンガシャンとはたを織っとった。 ほいたらそこへあまんじゃくが来てな， 「ここをちいと開けとくりょ」 ってって言うじゃ。 「われが好きなものをやるでちいと開けてくれんか」 って言うんじゃ。 ほいで，開けたらいかんっていわれたもんやで，喋らんでおったら， 「われが一番好きなものを持ってきたで，ちいと開けてくれんか」 って言うんや。 それじゃもんやで，やっぱしだまされてな，ちびっとだけ開けたんや。
瓜姫女郎を，柿の木の上につるし上げてしまったの。しばって。 そして，あまんじゃくは，瓜姫女郎の着物を着てな，ほしてはた織っとったん	瓜姫女郎は柿の木につるいてまって，瓜姫女郎が着とった着物はあかでが脱いで着てな，瓜姫女郎は裸にしてその柿の木につるいてまった。ほして，知らん	ほいたら， 「まぁちいと，開けてくれろ。そうしな，いらの指が入らんで って，いうもんやで，またちいっと開けた

瓜　姫　女　郎　A	瓜　姫　女　郎　B	瓜　姫　女　郎　C
やと。知らん顔して。	顔して瓜姫女郎になってはた織りをしとったんやと	んや。 ほうしたら，そこから指を入れて，ガァーッとつき開けてな，ほうして，瓜姫女郎を素っ裸にしてな，ほいで柿の木につるしあげてまったんやと。 ほいで瓜姫女郎の着物をあがで着てな，ほいでまた，カタンコットンとはたを織ったんやと。
そして，じじとばばが戻って来てな。 戻って来たら， 「さあまんま食ってな」	そしたら，じじとばばが 「今，戻って来たぞ。」 と言って入って来てな山から戻って来た。 「さあ，腹がへったろ。ゆうきょするで，さあ2階から下りて来い」 と，言って，2階のはた織りをしとったやつが，下の方へ降りて来てな，食いだいたんや。 ほしたところが，じゃがいもの塩煮じゃとか，おからの味つけじゃとか，昔はごちそうのうちじゃて。 鉢に盛りだいて， 「さあ，食わまいか。腹へったろ」 と言ってみんな食っとったら，その瓜姫女郎が，ペロッと入れもんのまま食っとんじゃて。 「こりゃおもしろい。家の姫にしちゃおかしいが」 と思って，そこで 「おもしろいこっちゃ」 と思ったんだて。	ほいで昼になって，じじとばばが法事から帰って来て， 「ねんね，ねんね，今戻ったぞ」というしなに，ねんねに食わせようと思って食べずに持って帰ったごちそうをいっぱい並べたんじゃ。 「さあ，食え，ねんね」 と言って，入れもんに入れて出いたったらな，じじとばばがちいっとこっちの方向いとるうちに，それを全部入れもんごと食ってまってな，ほいで 「ねんね，どうした入れもんまで」 と言うと， 「今の風で，すいーっと行った」 って言うんじゃてな。 ほいであんまりおかしいもんじゃで，イモを煮たやつを入れもんに入れて出いて，またちびっと横に向いとると，入れもんごとみんな食ってまって， 「今のどうしたねんね」 と，言うと， 「今の風ですいーっと行った」 と言うんじゃ。 ほれじゃもんやで，じじとばばが心配してな， 「これは，あんらがおいてったもんやから，気がおかしうなったんやないか」って， 「いつもの姫とはちがう」 と言ってな，ほいで， 「医者に見せなあかん」 ってな，台八車か乳母車か知らんけどな，そいつに乗せて医者へ連れてくまわしをしとったんやと。
ほしたところが，柿の木の上で鳥が鳴いたの。 「天車にのってホケキョ」 と，	ほしたら，瓜姫女郎は裸にして柿の木につるしあげられてしまった。 「あまんじゃくが天車に乗ってホケキョ」	ほいたらそれを見てな，裸にされた姫がな， 「あまんじゃくが天車に乗せてほけきょ」 って言うんじゃて。 じいがおもしろがって， 「今の何じゃった」

瓜　姫　女　郎　A	瓜　姫　女　郎　B	瓜　姫　女　郎　C
「うぐいすかなんか鳴いたんかなぁ」 ほいて，上を向いて見たら，ほしたら姫が裸にしてな，からみつけられてたんや。木の上に。	と，鳥のまねをして鳴いた。 祭りなんかあって出かけた。そしてなぁ，鳥が鳴いたもんで上をヒョイと見てみたら，瓜姫女郎が裸になってつるくけられていた。 瓜姫女郎になりすまいていたあまんじゃくは，本当の瓜姫女郎の着物を着て，お姫様のようになって，かごに乗って行きかけた。	って言うと，あまんじゃくが 「あれは天気がいいもんで，鳥が言うんじゃ」 と言うんじゃ。 そうしると，またあまんじゃくを乗せて行きかけると，また言うもんじゃで，ほうじゃもんやで声のしる方を，ホイッと見たれば，瓜姫女郎がまっ裸にしられて柿の木につるしあげられとるんじゃて。
そいで，それをかわゆい思って，助けだいて，あまんじゃくを怒ってな，かやの株の根へな，ふみつけたんや。	ほいじゃもんだで，じじとばばが怒って，急いで瓜姫女郎を 「ねんね，ひどいこっちゃったな」 と，言いしなに上から降ろいて来て，着物を着せて，あんばいをかこっといて，あまんじゃくは，籠に乗っとったもんだで，この騒動を知らなかった。怒って 「おのれ，家の大事な瓜姫女郎をひどい目にあわした」 かや株の根へ，籠から引きずり出いてふみつけた。	ほれじゃっもんで，これはあまんじゃくのいたずらじゃってことが一ぺんにわかってな，ほいでじじは姫を助けるのに柿の木へ上がってきなぁ，それからまたばばは，怒ってあまんじゃくをな，かや株のところへな， 「よぉもよぉもその大事な姫を，あーゆーことした！」 ってんでな，ふみこんじゃて。そのあまんじゃくを。 ほれじゃもんやで，今でも，かや株にはな，赤いあまんじゃくの血がしみこんで赤いんじゃと。 ほいで，姫はおろされて，大事にしられてな，まあ 「こういうことをしちゃいかんでよ。あんだけ開(あ)けんな開(あ)けんなっていったのに開(あ)けたもんやで，こうな目におうたんやで」 ってな，そのことをないないに注意してな，元通りになってな。
かやの株の根はな，今でもあまんじゃくの血でな，赤いってな。 まっくろけの話。	それで，あまんじゃくの血で，今でもかやの株が赤いんじゃて。 まっくろけの話	かやの根もとの赤いのは，あまんじゃくの血の色やていう。 まっくろけの話。

以上の比較から，「瓜姫女郎」の変容の特徴をまとめてみると，次の4点に整理することができる。

まず第1点は，増山たず子氏が「戸入の昔話」を，意識されだしたことである。

つまり，瓜が流れてきたのは，戸入の川上にあたる門入の方向からだということを，(C)では強調するようになった。これは他の昔話にもその傾向があり，地名や戸入に住んでいた人物であることの強調がみられる。

第2点は，整理され，つじつまがあう物語展開に，変化してきたことである。

その1つは，瓜姫女郎の誕生及び成長の場面が，(A)•(B)では欠落しているが，(C)に到って挿入され，昔話として完成されたと考えられる。

2つは，じじとばばがるすになる理由が，変化していることである。

(A)では，「出かけた」(B)では，「山へ行ってくるで」，(C)では「法事があるでな，どうでも行かならんで」と変化し，平凡な日でなく，「法事でどうしても」という特別の日に変化している。このことにより，事件が起こるべく「特別の日」としての予感を感じさせる。

3つは，あまんじゃくが来て，瓜姫女郎が戸を開けるまでの経緯が，(A)では「仕方がないので開けた」，(B)では「ものすごく心の優しい娘じゃったので，かわいいぞと思って開けた」，(C)では，「われが好きなものを持ってきたで開けよ」といわれて，「だまされて」開けるというふうに変化してきている。ここでも，瓜姫女郎が戸を開ける経緯に，説得力が生じてきたと考えられる。

4つは，(C)で，あまんじゃくがばけた瓜姫女郎を，医者に見せに行く場面が挿入されたことである。

つまり，瓜姫女郎が柿の木にぶら下げられていて，最後に生きて登場するためには，(B)の「祭りかなんかあって出かけた」では，瓜姫女郎とあまんじゃくが入れ替わってから，日数が経つことが想像され，つじつまが合わない。(C)のように，医者に見せに行くという，その日の行動で事件が発展していく方が，無理がないと考えるられる。

一方(A)の，いつもとちがう瓜姫女郎の様子を，じじとばばがおかしいと感じると，柿の木の上で鳥が鳴き，入れ替りを知るという展開には，無理はないがダイナミックさに欠ける。それに，かや株の根へふみ込むというふうに発展する為には，室内より外の方が理解しやすい。このように，(C)の変容が，昔話の完成度を高めているといえる。

第3点は，表現が(B)(C)に到るにつれて，より具体的にリアルなものに変化していることである。

例えば，「洗たくもんといっしょに瓜を持って籠に入れて川からあがったんじゃと」などである。話者が，話の中味を充分に理解し，具体的にイメージをうかべつつ語ってゆくなかでの変化だと受けとめられる。

第4点は，回を重ねるごとに，結びの部分に，教訓が生(なま)の言葉で語られるようになったことである。

例えば(C)では，瓜姫女郎が木から降されてから，じじとばばにお説教をされるというふうである。

他にも「たのきとかわうそのはなし」は，最後に「たのき汁にして食ったと」（1979年）・「たのき汁をしてじゃと」（1980年）が，「そのたのきは，しぶ柿を食わしていじわるをしたもんじゃでなぁ，かたき打ちをされた。人間はな，意地悪いことをするとかたき打ちをされるでなぁ。人の困る様なことをしちゃあかん」（1982年）という具合に変化する。

これは増山たず子氏が，常に「昔話には必ず教訓が折り込まれているんだ」とのべられており，話の持っている教訓性だけでは満足されず，寓意をことばでのべるという形になったと考えられる。

以上のように，増山たず子氏の語る「瓜姫女郎」が，1978年から1983年の5年間に大きく変化していることがわかる。増山たず子氏の場合，聞き手や語られる場所，あるいは増山氏の体調も含めた語りの環境の変化によって，話の内容が微妙に変わるといえる。また，語り込む，つまり数多く語る機会をもつことにより，1人の話者の中で，整理され完成された話に変化していくことも明らかである。さらに，徳山村がダムの湖底に沈むという問題が具体化し，徳山村の文化遺産を，残せるものなら残しておきたいと考えられ，我我に積極的にご協力下さった増山たず子氏自身の，さまざまな判断や「思い」も加わり変容がなされてきたと考えられる。

いずれにしても，山本花枝氏及び増山たず子氏両名とも，異ったタイプの昔話の語り手としての典型であるといえるだろう。

III

徳山村の口承文芸，わらべうた・昔話を採集し研究活動を開始した目的は第1報に示した「民話研究のつどい」の主旨に賛同し，私たちも研究会のメンバーとして名を連ねたことに始まる。「民話研究のつどい」の中途経過はともかく，私たちは会から離れて独自の研究活動をつづけて今日に至ったのである。

5年もの歳月を費やしたのは，少人数で制約された期間，時間に調査を行なった事と，もう一つには，わらべうた・昔話は演唱者及び話者と聞き手（遊び手）とで成立するものであるから，よき伝承者にめぐりあうこと，そして私たちにうたい語ってくださったものとして，しっかりと自分たちの耳と目で確認したいという気持があったからである。

徳山村のわらべうた•昔ばなしの分布状況，伝播伝承，伝承者自身の問題等が明らかになった現在，はじめて「民話研究のつどい」のよびかけ文「……子どもへ向ける再話表現の活動も，各地域において出版物や紙芝居，人形劇，口演童話などといった多様な形態をとりながらますます盛んになってきているようです。しかし，現時点における学問的芸術的な到達点から，いままでの諸作業の集積をながめてみるとき，民族遺産の正統な伝承という観点からも，それらに充分な体系がうちたてられるまでには，なお多くの研究作業が必要のように思われます」に呼応し，「民話採集及び民話研究を基礎にしながら，地域に根ざした児童文化・児童文学の質的向上をめざすこと」という目的達成に一歩でも近づいたのではないかと考える。

しかし，残念ながら「民話研究のつどい」は発足一年で研究活動を停止してしまっている。今後は，私たちがその意志をついで微力ながらもその目的の一部分だけでも達成できるよう努力をしたいと考える。

私たちは，さらに徳山村の文化の流入流出経路と思われる隣接地域，すなわち滋賀県木之本町，岐阜県坂内村，藤橋村，久瀬村，福井県池田町今庄町のわらべうた・昔話の伝承状況も把握して，児童文化の立場からこれらを見すえて，伝播，伝承，継承，創造の問題を追究し，研究したいと考える。

謝　　辞

5年間にわたる私たちの調査もようやく一応の終止符を打つことができました。この間には多くの方々のお力添えをいただきました。

調査のきっかけをつくってくださった雑誌「コボたち」編集長国枝栄三氏，本学助教授木戸季市氏，徳山村で御指導御助言いただいた教育長村瀬惣市氏，徳山中学校大牧富士夫氏，徳山小学校平方浩介氏，篠田通弘氏，現地で伝承者紹介の労をとってくださった増山たづ子氏，村山真一氏，江口幸司氏，小沢喜治氏，藤野末広氏，横田百合子氏，それに貴重な時間を費し，唄やお話を聞かせてくださった伝承者の皆皆様に深く感謝の意を表します。

（1983. 10. 31. 受理）

別表1　伝　承　者　一　覧

下開田（6名）	臼井義一	1898年（M31年12月20日）	臼井はる	1899年（M32年2月28日）
	安藤とめの	1899年（M32年9月6日）	江崎さき	1899年（M32年9月26日）
	大牧すえの	1902年（M35年9月5日）	宮崎おとき	1902年（M35年9月16日）
本郷（7名）	北村和兵	1889年（M22年）	北村つま	1991年（M24年8月16日）
	村山いちえ	1892年（M25年7月25日）	斉藤一雄	1901年（M34年1月8日）
	江口いとえ	1903年（M36年2月10日）	斉藤みのえ	1905年（M38年4月10日）
	北村秀子	1927年（S2年9月9日）		
上開田（5名）	門輪権平	1902年（M35年1月8日）	洲原精一	1906年（M39年5月12日）
	門輪たけ	1910年（M43年2月27日）	細尾ひめの	1911年（M44年10月10日）
	村沢智子	1934年（S9年）		
戸入（6名）	橋場金之丞	1898年（M31年3月3日）	坂本おふく	1905年（M38年4月4日）
	山本花枝	1905年（M38年7月16日）	広瀬小菊	1911年（M44年4月12日）
	増山たづ子	1917年（T6年4月15日）	泉みさお	1923年（T12年8月20日）
門入（5名）	清生しな	1893年（M26年5月20日）	清生治良右ヱ門	1914年（T3年4月25日）
	清生八重子	1925年（T14年2月25日）	泉金重	1923年（T12年3月10日）
	泉豊子	1940年（S15年12月22日）		
山手（3名）	堀田よしえ	1909年（M42年4月27日）	小西やす	1912年（M45年2月15日）
	堀田きみ	1930年（S15年）		
櫨原（3名）	清水安治	1904年（M37年10月29日）	清水ふさの	1911年（M44年7月15日）
	竹藪やすの	1916年（T5年7月1日）		
塚（6名）	梅本まさえ	1904年（M37年3月3日）	小倉あきえ	1909年（M42年8月25日）
	橋本一治	1915年（T4年8月20日）	岩須あきの	1922年（T11年12月19日）
	橋本美代	1924年（T13年3月13日）	横田志ず子	1928年（S3年1月10日）

別表2　徳山村採集わらべうた一覧

曲番	題名	分類	採集地	採集年月日	演唱者	所載
1	あったら松やから松や	てまり唄	戸入	1978・9・14	山本花枝	第I報（第5集）
2	いざや若い衆	手おどり唄	戸入	〃	山本花枝	〃
3	でんでんたたくは	てまり唄	本郷	1978・9・15	北村つま	〃
4	じょりかくし	鬼あそび唄	本郷	〃	北村つま	〃
5	れんげの花と桜の花と	てまり唄	本郷	〃	北村つま	〃
6	てんまりやてんまりや	てまり唄	本郷	1979・8・8	斉藤みのえ他	第III報（第6集）
7	向こうの山に光るは何や	てまり唄	本郷	〃	斉藤ひろえ	〃
8	たしかにたしかに	てまり唄	本郷	〃	斉藤みのえ・江口いとえ	〃
9	こっちから見えるは	てまり唄	本郷	〃	斉藤みのえ	〃
10	わしんうしろの	てまり唄	本郷	〃	斉藤みのえ	〃
11	れんげの花と桜の花と	てまり唄	本郷	〃	斉藤みのえ	〃
12	おおなみこなみ	縄とび唄	本郷	〃	北村秀子	〃
13	ぜんまいわらび	鬼あそび唄	本郷	〃	江口いとえ	〃
14	ねんねんころいち	子守唄	本郷	〃	斉藤みのえ	〃
15	でんでんたたくは	てまり唄	本郷	〃	斉藤みのえ	〃
16	じょりかくし	鬼あそび唄	本郷	〃	斉藤みのえ・斉藤ひろえ	
17	あったら松やから松や	てまり唄	本郷	〃	斉藤みのえ	〃
18	かいかいでまろ	てまり唄	本郷	〃	斉藤みのえ	〃

曲番	題名	分類	採集地	採集年月日	演唱者	所載
19	すすれすすれ一杯すすれ	てまり唄	本郷	1979・8・8	斉藤みのえ	第III報(第6集)
20	とんとんとべさは	てまり唄	戸入	1979・8・9	増山たづ子・山本花枝	〃
21	みやの前から	てまり唄	戸入	〃	増山たづ子・山本花枝	〃
22	いっちょうめのぶんど	てまり唄	戸入	〃	増山たづ子	〃
23	はじった	おはじき唄	戸入	〃	増山たづ子	〃
24	てんてんてんまる	てまり唄	門入	1979・8・9	清生した・清生八重子	第VII報(第7集)
25	たけの子が出だす	てまり唄	門入	1979・11・23	清生八重子	〃
26	こんめおした	お手玉唄	門入	1979・8・9	清生しな・清生八重子	〃
27	おおさいどりかい	手おどり唄	門入	1979・11・23	清生八重子・治良右ヱ門	〃
28	かあかあ勘三郎	鬼きめ唄	門入	〃	清生八重子	〃
21	びんびんここのつ	鬼きめ唄	門入	〃	清生八重子	〃
30	ひとりふたりはいめの子	鬼きめ唄	門入	〃	清生八重子	〃
31	なかのなかの小坊主	鬼あそび唄	門入	〃	清生八重子	〃
32	坊さん坊さんどこいくね	鬼あそび唄	門入	〃	清生八重子	〃
33	ちんこばあらば	片足とび唄	門入	〃	清生八重子・治良右ヱ門	〃
34	ねんねんねりの木	子守唄	門入	〃	清生八重子	〃
35	ことしはじめて	子守唄	門入	〃	清生八重子	〃
36	うらのうらの	てまり唄	門入	〃	清生八重子	〃
37	すらすら一杯すすろ	てまり唄	門入	〃	清生八重子	〃
38	じょりかくし	鬼あそび唄	門入	〃	清生八重子	〃
39	こっから見えるは	てまり唄	山手	1981・8・9	堀田よしえ	第VII報(第8集)
40	げんごろどこいきゃる	てまり唄	山手	〃	堀田よしえ	〃
41	ここのおとらの	てまり唄	山手	〃	小西やす	〃
42	ここのおきくは	てまり唄	山手	〃	小西やす	〃
43	あったら松やから松や	てまり唄	山手	〃	小西やす・堀田よしえ	〃
44	わしが小さいときや	子守唄	山手	〃	小西やす・堀田よしえ	〃
45	じょりかくし	鬼あそび唄	山手	〃	堀田よしえ	〃
46	おかくかく	子もらいあそび唄	山手	〃	堀田よしえ	〃
47	ねんねんぼうの寺には	子守唄	山手	〃	小西やす	〃
48	こんめおした	お手玉唄	山手	〃	堀田よしえ・小西やす	〃
49	おおさいどりか	手おどり唄	山手	〃	堀田よしえ	〃
50	おしろのせおにさのせ	てまり唄	山手	1981・9・13	小西やす・堀田よしえ	〃
51	すすれすすれ一杯すすろ	てまり唄	山手	〃	小西やす・堀田よしえ	〃
52	かくれんぼにかくれがさ	鬼きめ唄	山手	〃	堀田よしえ	〃
53	かくれんぼにかくれがさ	鬼きめ唄	山手	〃	小西やす	〃
54	ここのおばさ	てまり唄	櫨原	1981・8・10	清水ふさの	〃
55	じょりかくし	鬼あそび唄	櫨原	〃	清水ふさの	〃
56	かくれんぼにかくれがさ	鬼きめ唄	櫨原	〃	清水ふさの	〃
57	こっから見えるは	てまり唄	櫨原	〃	清水ふさの	〃
58	おかくかくかく	子もらいあそび唄	櫨原	〃	清水ふさの	〃
59	ここのおきく	てまり唄	櫨原	〃	清水ふさの	〃
60	おおさいどりか	手おどり唄	櫨原	〃	清水ふさの	〃
61	ねんねんころいち	子守唄	櫨原	〃	清水ふさの	〃
62	すすれすすれ一杯すすれ	てまり唄	櫨原	〃	清水ふさの	〃
63	こっから見えるは	てまり唄	塚	1982・8・27	梅本まさえ	第X報(9集)
64	さんがんまえがみ	てまり唄	塚	〃	梅本まさえ	〃
65	れんげの花と桜の花と	てまり唄	塚	〃	梅本まさえ	〃

曲番	題名	分類	採集地	採集年月日	演唱者	所載
66	ここのおきく	てまり唄	塚	1982・8・27	梅本まさえ・小倉あきえ	第X報（9集）
67	あったら松や	てまり唄	塚	〃	梅本まさえ	〃
68	すすれすすれ	てまり唄	塚	〃	小倉あきえ	〃
69	じょりかくし	鬼あそび唄	塚	〃	梅本まさえ	〃
70	かくかくかれがさ	鬼きめ唄	塚	〃	梅本まさえ・小倉あきえ	〃
71	おおさいどりか	手おどり唄	塚	〃	梅本まさえ	〃
72	ねんねころいち	子守唄	塚	〃	小倉あきえ	〃
73	ここから見えるは	てまり唄	塚	1982・9・25	岩須あきの・橋本美代 横田志ず子	〃
74	すすれすすれ	てまり唄	塚	〃	〃	〃
75	じょりかくし	鬼あそび唄	塚	〃	〃	〃
76	おおさいどりか	手おどり唄	塚	〃	岩須あきの・横田志ず子	〃
77	おさら	お手玉唄	塚	〃	横田志ず子	〃
78	いちいち一ちょうとって	おはじき唄	塚	〃	横田志ず子	〃
79	今日発つか明日発つか	てまり唄	下開田	1982・9・25	江崎さき	〃
80	おとらのまえがみ	てまり唄	下開田	〃	江崎さき	〃
81	てんまりあがれば	てまり唄	下開田	〃	江崎さき	〃
82	おかくおかく	子もらいあそび唄	下開田	〃	江崎さき・宮崎とき	〃
83	おおさいどりか	手おどり唄	下開田	〃	江崎さき・宮崎とき	〃
84	すすれすすれ	てまり唄	下開田	〃	宮崎とき	〃
85	ねんねころいち	子守唄	下開田	〃	宮崎とき	〃
86	あったら松や	てまり唄	下開田	〃	江崎さき	〃
87	わしのうしろの	てまり唄	下開田	〃	宮崎さき	〃
88	こっから見えるは	てまり唄	下開田	〃	江崎さき・宮崎とき	〃
89	ぜんまいわらび	鬼きめ唄	下開田	〃	江崎さき・宮崎とき	〃
90	こっから見えるは	てまり唄	上開田	1983・8・10	細尾ひめの	第XVI報（10集）
91	ぜんまいわらび	鬼きめ唄	上開田	〃	細尾ひめの	〃
92	ぜんまいわらび	鬼きめ唄	門入	〃	門輪たけ	〃
93	ぜんまいわらび	鬼きめ唄	戸入	1983・8・9	坂本おふく	〃
94	大風吹けまんじゅくれ	となえ唄	戸入	〃	坂本おふく	〃
95	茶ん茶ん茶釜に	となえ唄	戸入	〃	坂本おふく	〃
96	すすれすすれ	てまり唄	戸入	〃	坂本おふく	〃
97	みやの前から	てまり唄	戸入	〃	山本花枝	〃
98	中の中の小ぼとけ	鬼あそび唄	戸入	〃	増山たづ子	〃
99	こかおこかお	子もらいあそび唄	戸入	〃	坂本おふく	〃
100	一れつちんぱん	てまり唄	戸入	〃	増山たづ子	〃
101	てんまりてんまりや	てまり唄	下開田	1983・8・9	大牧すえの	〃
102	うちのおきくは	てまり唄	下開田	〃	大牧すえの・江崎さき・宮崎とき・安藤とめの	〃
103	でんでんたたくは	てまり唄	下開田	〃	江崎さき	〃
104	おとらのまえがみ	てまり唄	下開田	〃	江崎さき	〃
105	一かけ二かけ三かけて	てまり唄	下開田	〃	江崎さき・宮崎とき	〃

別表3　徳山村のわらべうた分布状況

題名	分類	塚	櫨原	山手	本郷	下開田	上開田	戸入	門入
あったら松や	てまり唄	67		43	17	86		1	
でんでんたたくは	〃				3・15	103			
れんげの花と桜の花と	〃	65			5・7・11				
てんまりやてんまりや	〃				6	79・101			
たしかにたしかに	〃				8				
こっちから見えるは	〃	63・73	57	39	9	88	90		24
わしんうしろの	〃				10	87			36
かいかいでまろ	〃				18				
すすれすすれ	〃	68・74	62	51	19	84		96	37
とんとんとべさ	〃							20	
みやの前から	〃							21・97	
いっちょめのぶんど	〃							22	
たけの子が出だす	〃								25
げんごろどこいきやる	〃			40					
ここのおとらの	〃	64		41		80・104			
ここのおきくは	〃	66	59	42		102			
おしろのせおにさのせ	〃			50					
ここのおばさ	〃		54						
てんまりあがれば	〃					81			
いちれつちんぱん	〃							100	
一かけ二かけ三かけて	〃					105			
じょりかくし（くねんぼ型）	鬼あそび唄	69・75	55	45	4・16				
じょりかくし（じょんじょん型）	〃								38
なかのなかの小坊主	〃							98	31
坊さん坊さんどこいくね	〃								32
ぜんまいわらび	鬼きめ唄				13	89	91	93	92
かあかあ勘三郎	〃								28
びんびんここのつ	〃								29
ひとりふたりはいめの子	〃								30
かくれんぼにかくれがさ（打出の小槌型）	〃	70	56	52					
かくれんぼにかくれがさ（みのきて型）	〃			53					
おかくかく	子もらいあそび唄		58	46		82		99	
おおさいどりか	手おどり唄	71・76	60	49		83		2	27
こんめおした	お手玉唄			48					26
おさら	〃	77							
いちいち一ちょうとって	おはじき唄	78						23	
おおなみこなみ	縄とび唄				12				
ちんこぱあらば	片足とび唄								33
ねんねころいち	子守唄	72（前半）	61（前半）	44	14	85			34（後半）
ねんねん坊の	〃	72（後半）	61（後半）	47					
ねんねんねりの木	〃								34（前半）
ことしはじめて	〃								35
大風吹けまんじゅうくれ	となえ唄							94	
茶ん茶ん茶釜に	〃							95	

別表4　「徳山村の昔話」分布および採集年月日

原題＼分類	日本昔話名彙	日本昔話集成	下開田	本郷	山手	櫨原	塚	上開田	戸入	門入
狸と川瀬	川瀬と猿	3.川瀬と猿							増山たづ子 ④(54.8.4) (55.8.27) (57.9.2)	
熊と川瀬と兎	〃	〃							増山たづ子 ④(54.8.8) (55.8.27)	
猫とねずみ		12.十二支の由来					橋本一治 ⑫(57.8.5)			
釈迦ねはん(まむし)				北村和兵 ①(53.9.16)					増山たづ子 (58.5.5)	
釈迦ねはん(ねずみ)		12.十二支の由来							増山たづ子 (58.5.5)	
兎とほうとう	餅競い	21.猿と蟇の餅競争	大牧すえの (58.8.9) 江崎さき (58.9.24)		堀田きみ (57.9.3)		梅本まさゑ ⑫(57.8.3) 橋本一治 (58.5.4)		増山たづ子 ④(54.8.8)	清生しな ⑪(57.9.26)
猿蟹合戦	猿蟹合戦	24.猿蟹柿合戦	江崎さき (57.9.25) (58.8.9)	江口いとえ・斉藤みのえ (54.8.8) (54.9.9)				細尾ひめの (58.6.7)	増山たづ子 (54.9.9) (58.5.5) 橋場金之丞 ⑧(55.8.28)	清生しな ⑪(57.9.26)
漏るぞおそろし	古屋の漏り	33.古屋の漏り	江崎さき (57.9.25)					細尾ひめの (58.6.7)	増山たづ子 (58.5.5)	清生しな ⑪(54.11.23) (57.9.26)
きつつき	雀孝行	47A.雀孝行							増山たづ子 (58.5.5)	
みずひょろひょろ	〃	〃		北村和兵 ①(53.9.16)					増山たづ子 (58.5.5)	
釈迦ねはん(すずめ)	雀孝行	〃		北村和兵 ①(53.9.16)					増山たづ子 (58.5.5)	
まむしわらび	蕨の恩(蕨と蛇)	81.蕨の恩				清水安治 (57.8.4)			増山たづ子 (54.11.24) (58.5.5)	清生しな・治良右ェ門 八重子 ⑪(54.11.23)
美しい娘	蛇聟入	101A.蛇聟入芋環型							山本花枝 (53.9.16)	

原題＼分類	日本昔話名彙	日本昔話集成	下開田	本郷	山手	櫨原	塚	上開田	戸入	門入
大蛇のはなし	蛇聟入	101A.蛇聟入芋環型							増山たづ子 ①(53.9.16)	
蛇聟	〃	101B.蛇聟入水乞型	安藤とめの (58.8.9) 大牧すえの (58.8.9)							
大蛇	〃	〃							山本花枝 (53.9.16)	
蛇のはなし	〃	〃					梅本まさゑ ⑫(57.8.3) 橋本美代 (57.8.5) ⑫(57.9.25)			
びっきになったお嫁さん	蛙女房	111.蛙女房							増山たづ子 (54.8.8)	
山姥(蛙が娘に化けた)	〃	〃							山本花枝 (53.9.16)	
一寸法師	一寸法師	136C.一寸法師					梅本まさゑ (58.5.4)			
桃太郎	桃太郎	143.桃の子太郎	江崎さき (57.9.25)	江口いとえ・斉藤みのえ・北村秀子 ⑤(54.8.8)	堀田よしゑ (57.8.7)	竹藪やすの ⑫(57.8.4)	梅本みさゑ (57.8.3) (58.5.4) 橋本美代 (57.8.5) ⑫(57.9.25) 橋本一治 (57.8.5)	細尾ひめの (58.6.7) 村沢智子 (58.10.13)	増山たづ子・山本花枝 ⑤(54.9.9) 橋場金之丞 ⑧(55.8.27)	清生しな ⑪(57.9.26) 泉豊子 ⑪(57.9.26)
うり姫女郎	爪子姫子	144.瓜子織姫			堀田よしゑ・小西やす ⑬(57.8.6)	清水安治 ⑫⑬ (57.8.4) 竹藪やすの (57.8.4)	橋本美代 (57.8.5) ⑫⑬(57.9.25) 梅本まさゑ ⑬(58.5.4)		増山たづ子 ④(54.9.9) (56.9.18) (58.9.20) 山本花枝 ⑬(58.8.9)	
うり姫御前	〃	〃	江崎さき ⑬(57.9.25) (58.8.9) 大牧すえの (58.8.9) (58.9.24)					細尾ひめの (58.6.7)		清生しな ⑪⑬ (57.9.26)

原題＼分類	日本昔話名彙	日本昔話集成	下開田	本郷	山手	櫨原	塚	上開田	戸入	門入
子育てゆうれい	子育て幽霊	147A.子育幽霊			堀田よしゑ（57.9.2）					
ぼたもちになったほうとう	人が見たら蛙になれ	163B.牡丹餅は蛙							増山たづ子④(54.8.8) 橋場金之丞（55.8.28）	
こぶとり	瘤取爺	187.瘤取爺							増山たづ子（58.8.9）	
花さか爺	花咲爺	190.花咲爺					梅本まさゑ・橋本一治（58.5.4）		増山たづ子（58.8.9）	
へたきりすずめ	舌切雀	191.舌切雀	江崎さき（57.9.25）	北村和兵①(53.9.16)	堀田よしゑ・小西やす⑪(57.8.6)		橋本まさゑ⑫(57.8.3)（58.5.4） 橋本一治（57.8.5）		増山たづ子（57.9.2）（58.8.9）	清生しな⑪(57.9.26)
お銀小銀	お月お星（お銀小銀ともいう	207.お銀小銀	江崎さき（57.9.25）		小西やす⑪(57.9.2)					
継子いじめ	〃	〃			堀田よしゑ（57.9.2）			細尾ひめの（58.6.7）	増山たづ子（58.5.5）	
浦島太郎		224.浦島太郎					橋本一治⑫(57.8.5)		橋場金之丞⑧(55.8.28)	
蛇のはなし	食わず女房	244.食はず女房					梅本まさゑ⑫(58.5.4)（58.5.4）			
山姥のはなし	〃	〃			堀田よしゑ⑪(57.8.6)（57.9.2）				山本花枝①(53.9.16) 増山たづ子（57.9.2）④(54.8.8)	清生しな・八重子（54.11.23） 清生しな（57.9.26）
やもめ	〃	〃							橋場金之丞⑧(55.8.28)	
嫁さんは蛇	〃	〃					橋本美代⑫(57.9.25)			
めし食わん嫁さん										清生八重子⑪(54.11.23)

原題＼分類	日本昔話名彙	日本昔話集成	下開田	本郷	山手	櫨原	塚	上開田	戸入	門入
食わず女房	食わず女房	244.食はず女房					横田志づ子・岩須あきの ⑫(57.9.25)			
ぐたとかめ		333.瓶の尻	大牧すえの (58.9.24)						山本花枝 ①(53.9.16) 増山たづ子 (55.8.27)	
肉付の面		398.肉附の面		北村和兵 ①(53.9.16)	堀田よしゑ ⑪(57.9.2)		梅本まさゑ・橋本一治 (58.5.4)		増山たづ子・山本花枝 (58.5.5) 坂本おふく (58.8.9)	
年寄りをきらう殿	姥棄山	523A.親棄山							増山たづ子 (54.11.24)	
和尚と小僧（打たんたいこ）	和尚と小僧	524.打たぬ太鼓							山本花枝 ①(53.9.16)	
和尚と小僧（かみすり）	〃	529A.鮎は剃刀	江崎さき (57.9.25) 大牧すえの (58.9.24)						橋場金之丞 ⑧(55.8.28)	
和尚と小僧（指合図）	和尚と小僧	530.指合図							山本花枝 ①(53.9.16) (55.8.27) (56.9.18) (58.9.20) 橋場金之丞 (55.8.27)	
和尚と小僧（みつをなめる）	〃	532.飴は毒			堀田よしゑ ⑪(57.8.6)					
和尚と小僧（あまざけ）	〃	〃		江口いとえ (54.8.8)						
和尚と小僧（おすし）	〃	535.餅は本尊様	大牧すえの (58.9.24)	江口いとえ (54.8.8)	堀田よしゑ ⑪(57.8.9)				山本花枝 ①(53.9.16) (55.8.27)	
和尚と小僧（馬のしり）	〃	539.馬の落物							橋場金之丞 ⑧(55.8.28)	
和尚と小僧（茶釜のしり）									橋場金之丞 ⑧(55.8.27)	

原題＼分類	日本昔話名彙	日本昔話集成	下開田	本郷	山手	櫨原	塚	上開田	戸入	門入
和尚と小僧（重箱の中味）									山本花枝 ①(53.9.16)	
ええとこもっこ		638.長い名の子	大牧すえの (58.9.24)							
ひょいとこもち			大牧すえの (58.9.24)							
ぼいとこせ					小西やす (57.8.6) (57.9.2)					
おとぎり草のいわれ									増山たづ子 ①(53.9.16)	
大根と人参								村沢智子 (58.10.14)		
蛇のはなし							梅本まさゑ (57.8.3)			
蛇の毒							梅本まさゑ ⑫(57.8.3)			
山姥のはなし				村山いちえ ①(53.9.16)						
きつね							梅本まさゑ (57.8.3)			
へっぴのはなし									増山たづ子 (54.8.8)	
てんと狸									増山たづ子 ④(54.8.8) (54.8.27) (57.9.2)	
熊と兎							梅本まさゑ ⑫(57.8.3) 橋本一治 (58.5.4)		増山たづ子 ④(54.8.8)	
そば畑の狸									橋場金之丞 ⑧(55.8.28)	
きつねのはなし							梅本まさゑ (58.5.4)			
きつねに化かされた話									橋場金之丞 ⑧(55.8.28)	

原題＼分類	日本昔話名彙	日本昔話集成	下開田	本郷	山手	櫨原	塚	上開田	戸入	門入
熊のでてくる話									橋場金之丞 ⑧(55.8.28)	
きつねとたぬきの化かしあい									増山たづ子 (58.5.5)	
猫化け									増山たづ子 (58.5.5)	
あずきぼん										清生しな (54.11.23)
1口ばなし						清水安治 ⑫(57.8.4)				
かしこい兎のはなし			江崎さき (57.9.25)							
嫁殺し				北村つま ①(53.9.16)						
緒をうむ女									山本花枝 ①(53.9.16)	
雪男のはなし									増山たづ子 (58.6.7)	
和尚と猫									橋場金之丞・山本花枝 (55.8.28)	
ばか息子と母親									増山たづ子 (54.11.24)	
うさぎとかめ							梅本まさゑ ⑫(57.8.3)			
弘法の足かくし									橋場金之丞 ⑧(55.8.27) 増山たづ子 ④(55.8.27) (58.5.5)	
かっぱのはなし {魚の恩返し 背中あぶり すもう 水泳 うり ぬれた手紙 年貢			江崎さき (58.8.9)	北村つま・村山いちえ ①(53.9.16) (54.8.8)			梅本まさゑ ⑫⑫ (57.8.3) 橋本美代 ⑫(57.8.5) 横田志ず子 ⑫(57.9.25)	細尾ひめの (58.6.7)	増山たづ子 ④④ (54.8.8) (58.8.9)	泉豊子 (57.9.26)

(○○○)は採集年月日　○数字は掲載報番号